

わが心の遍歴

(8) キリスト教と仏教について

花岡 永子

幼い時からキリスト教と仏教と儒教的雰囲気の中で育ってきた筆者は、今から振り返って考えてみると、キリスト者として、しかも禅に生きようになった過程は自分で良く頷ける。医師の祖父は厳しい儒教的な生き方をしていたし、祖母はキリスト者であり、その頃としては珍しい勉強好きの英文学科卒の英語教師として奴隷解放の英語の歌や賛美歌を子供の頃から幾つも教えてくれた。三歳の頃に既に立派な難しい大きな文語の新旧約聖書を贈られ、内容を全く理解はしていなかったが、お飯事^{おはつき}にも、片仮名のイエスやヨハネの名を従兄弟やお友達と、何か不思議な気持ちで呼びながら、何時も楽しく使っていた。父は自然科学者であったが、祖父も父も曹洞禅を家の宗教として、世俗の中に生きてはいたものの、何処か道元を思わせる様な生活習慣を持っていた。祖父も父も亡くなってから、道元の著書を読んでいてハッと祖父や父の生活を思い起こすことがよくある。両者共に、一切の無駄を省いて、貧に徹して、どんな作務をも当然のこととして実に質実剛健に生き抜いていたからである。両者共に、身分や権力や富よりは自由な研究を尊び、戦争を嫌い、登山や暮やスポーツを好み、理屈無しの子煩悩であった。母は、祖母の影響で、洗礼は受けてはいなかったが、キリスト教的な生き方をしながら、祖父や父の禅をも受け入れる様な生活をしていた。母の祖父や父は、漢籍の研究者で儒教的な生活をしていたために、むしろすべての宗教を受け入れる様な宗教的な生活をしていた。第二次世界大戦中の、父が満州に出征中で生死不明の数年は、母はいつも田舎の神社やお寺に子らを連れて行って、殆ど何処のお寺にも神社にも最敬礼することを子らに強いた。何処の神様にも、仏様にも別け隔てなく、同じように最敬礼をして、生きていることへの感謝をしなければいけないというのが、小さい頃からの母の教育であった。母以外は、宗教のことは何も言わなかった。全く自由な雰囲気の中で育ち、どの宗教でなければいけないということは全く無かった。それで、大学に入学してからも、様々な宗教を自分なりに理解したり、訪ねてみたりして、色々と試行錯誤を重ねなければならなかった。人間としての生き方としては、大変有り難い教育を家庭で受け得たと思っている。大変困難な人生ではあるが、自分の判断でこの様な人生を歩まざるを得ない様な教育をしてくれた、今は既に亡き両親に対して、感謝の念に堪えない思いで一杯である。



花岡 永子（別姓：川村 永子） / はなおか・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年女性老練家'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化科学研究科教授として哲学、宗教学を教える。

著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

1. キリスト教について

キリスト教が何であるかと言えば、一般的には、ヨセフとマリアの子である人間イエスを、人類の一人ひとりの罪を贖って死と律法から救い出し、「永遠のいのち」へと導く救い主としてのキリスト(救済者)と説く、世界宗教(普遍宗教)の一つであると理解される。そして、古い自己に死んで、キリストとしてのイエスの人格と教義に従って、キリストとしてのイエスに倣って、新しい永遠のいのちに復活し、聖霊に生かされて他者の魂の救済のために十字架を背負い、新しい「永遠のいのち」を生きることで理解される。しかし、イエスもキリストも、絶対無がこの現象界に表現されてきた一つの形であり、いわば絶対無の一種の「自己限定」(＝自己否定の形。例えば、濁流に呑まれた我が子の為に母親がその河の中に飛び込み、自らの命を絶ってその子を救う場合、それが本能的であろうと意志的であろうと、母のこの行為は母の母自身による「自己限定」であると言える)であることが、自らに自覚された場合には、人間の自己はそのような信仰の場に止まり続けることができるであろうか。絶対無の顕れないしは表現としての神とかイエスとかキリストという自覚が自らに自覚される場合には、人間の自己は、絶対的な人格としての神の底なき底とも表現される「絶対無の開け」(いかなる思惟の枠組みも設けられていない、道元の『正法眼蔵』で語られているような「非思量の思量」が可能となる開け)へと導かれて行くのではないであろうか。その導かれ方は、自らの意志だけによると見えようが、絶対の無限の開けからの開けの力だけによると見えようが、根源的にはそれら両者によってのものとして理解される。

そのような自覚が自らに目覚めてくるのは、それ迄の自らの神やキリストへの信仰が、自らの捏造した神やキリストへの信仰であったと自覚された時ではないであろうか。そのような場合には、神は、人間の思いを越えたところに開かれた、人格的であるのみならず、非人格的な次元にまで浸透していく力を備え、人格と非



新しい思想を模索するエラノス会議の1994年8月の講演者一同。
前列左から会長のホルヌング教授、筆者、副会長のシャーベイト教授。



シンクタンク大学であるアメリカのIOHD大学の日本校での名誉博士号授与式(2001年4月)。
向かって左からGeorge Morishita学長と筆者。

人格、人間的な倫理の次元での善悪や正邪、有と無、聖と俗、事と理の二元性を越えた、しかも三位一体的なあり方をすら越えた、一切の二元性、両極性を越えた、それらの根源に開かれた次元での働きを可能にする働きそのものと理解されるのではないであろうか。上記で今、キリスト教から禅仏教に開けて行く場合を想定して語ったが、「逆もまた然り」と言えるのではないであろうか。禅仏教からキリスト教へ出て行く方向も、勿論可能であり、その様な人生を送っている方々も多々見られるからである。また、一切の二元性、両極性の根源としての「絶対無の神」に生きようとしている自己が、そのような深みないしは深淵から出て来て、絶対無の開けが現象界に形を取った世界に生きることこそ自らの生の使命を感じる場合も勿論あり得ると考えられるからである。

両者の場合は、これまでも幾度か出てきた五つの思惟や思索のパラダイム(相対有、相対無、絶対有、虚無、絶対無)で理解すると、もっと分かり易くなると思われる。相対有(現象界)をパラダイムとする立場は、絶対視されれば唯物論となり、絶対視されない場合には他のパラダイムのいずれか一つないしは幾つかが絶対視される方向へと動いて行く。相対無のパラダイムの立場は、絶対視されれば実存思想や実存哲学となり、絶対視されない場合には他のパラダイムのいずれか一つないしは幾つかが絶対視される方向へと動いて行く。絶対有のパラダイムの立場は、絶対視されれば、ハイデッガーが批判するような古代哲学のソクラテス以来ヘーゲルに至る西欧の伝統的な形而上学におけるイデア(idea、原型) ウジア(ousia、本質) エイドス(eidos、形相)そして実体的な(=永遠で、普遍で、変わらざる、全知・全能の)神(theos)を核心とするような絶対有の神を核心とする神学や実体的な哲学となり、絶対視されない場合には、他のパラダイムのいずれか一つないしは幾つかが絶対視される方向へと動いて行く。絶対無のパラダイムの立場は、本来自らのパラダイムの立場だけを絶対視することのないパラダイムである。だから、もし絶対無のパラダイムの立場だけが絶対視されれば、この立場はもはや絶対無のパラダイムの立場ではなくなる。というのも、「絶対無」の「絶対」は、絶対の自己否定を意味し、この自己否定によってこそ自らの慈悲(愛)の働きとしてのあり方(=無)を生かすことができるからである。

以上の意味において、禅仏教に生きるとは、自らはどのパラダイムをも絶対視することなく、ただ絶対無以外の四つのパラダイムの立場をケース・バイ・ケースにすべて認めながらも、同時に絶対無の生かされる生き様である、各々の場合に生かされ得る慈悲(愛)の形を全身全霊を懸けてひたすら工夫することを意味することになる。そして、そのような禅仏教の生き方からキリスト者として、例えば祈りの対象であるような絶対的人格としての絶対有の神に対しての信仰に回心することは、絶対無以外の四つのパラダイムに同時に慈悲を裏打ちすることではなく、絶対有のパラダイムの立場に全身全霊を懸けることを意味することになる。

2. 仏教について

仏教は、一般的には、人々が「苦」から修行(八正道)によって救済され、真の自己に目覚めると説く、世界宗教の一つで、それは、利己的に生きるエゴ(自我)に死して、真の自己が目覚めて、他者が真の自己になる救済のきっかけ(契機)となる教えを説くとして理解されている。そこには仲介者はなく、仏性は自己の自性で、両者ともに無性(無実体)である。しかし、キリスト教も仏教も、絶対無の表現としての神や仏を越えた両者の「根源の開け」が経験され、それが表現され、制度化された普遍(世界)宗教であると理解され得る。しかし、絶対無が表現されるときには、各時代・各民族・各国家等における文化が大きな役割を演じ、その表現形態としての各宗教は相互に全く相違していると言える。

そのような相違の中で、例えば、筆者のようにキリスト者が同時に禅仏教に生きることになるという事実は、キリスト教のみを絶対視していた自己が、キリスト教の神の更なる深淵での根源的宗教経験が一切の世界宗教における一であることを自覚し、更に五つのパラダイムの立場が各々中心であると同時に周辺であることを経験したからであると言える。